八尾歴史物語　五十九巻

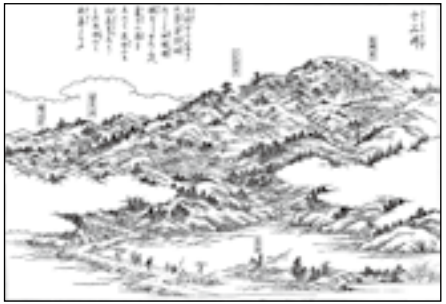
河内名所図会を歩く⑩～十三街道・後編（街道の整備）～

『河内名所図会』では、玉祖神社をはじめ、在原業平ゆかりの旧跡や十三峠、水呑地蔵院などが紹介されていました。前編（令和4年9月号掲載）では神立から十三峠までの峠道を人々の信仰をたどりながら、歩いてみました。

安土桃山時代、豊臣秀吉が大坂城築城に必要な石材を調達するため、この辺りにあった古墳の横穴式石室を壊し、十三街道を通り、石材を運び出しました。この時に大坂城に至る道として大規模な整備がされます。

しかし、十三街道はさらに古くから歴史上有名な人物と関係がありました。神立の地蔵堂からやや下ったところに「向山瓦窯」という平安時代後期の瓦窯があります。この窯では、藤原頼通が宇治に建てた平等院鳳凰堂のため、特別に瓦をつくっていました。近年の調査で、驚くことに向山瓦窯の瓦が900年以上経った鳳凰堂の屋根に残っていたことがわかったのです。

神立から宇治まで直線距離で30km以上あり、5万枚以上も重量のある瓦を、十三峠を越えて人の力で運ぶのは難しいでしょう。十三街道を西に下り、藤原摂関家が所有していた荘園・玉櫛庄のほとりの玉串川から船に積んで北へ進み、淀川そして宇治川をさかのぼったのでしょう。瓦の運搬には、奈良時代後期の由義寺でも河川を利用したとみられ、中河内の水運は、街道とともに重要な交通手段でした。



▲十三峠の絵

問 観光・文化財課
TEL 924・8555
FAX 924・3995